

日本英文学会関東支部  
第 20 回（2021 年度秋季大会）  
プログラム

日時：2021 年 11 月 6 日（土）

オンライン（Zoom ミーティング）同時配信方式にて実施

※大会参加には、事前の申し込みが必要です。申し込みは、10 月 23 日（土）から可能です。詳しくは関東支部 HP をご覧ください。

※11 月 7 日（日）～13 日（土）の間、関東支部 HP 上に資料を掲載する形で、2021 年度日本英文学会関東支部「総会」を開催させていただきます。詳しくは関東支部 HP とメールマガジンでご案内します。

日本英文学会関東支部事務局

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂 1-2

研究社英語センタービル

Tel/Fax: 03-5261-1922

E-mail: kanto@elsj.org

12:10	Zoom への入室開始	
<b>研究発表 1</b> 12:20   13:00	第 1 室	第 2 室
	『失樂園』における救済の教義 —マルティン・ルターの良心論の視点に基づ く死から生への転換  (発表者) 堀内 直美 (司会) 富樫 剛	『グレート・ギャツビー』の鉄道旅行  (発表者) 秋山 義典 (司会) 山本 洋平
<b>研究発表 2</b> 13:10   13:50	第 1 室	第 2 室
	善悪が揺らぐ小説 —ヴェラ・ブリテンの『名誉階級』にみるフ ェミニズムの表出  (発表者) 甲斐 絵理 (司会) 片山 亜紀	アーシュラ・K・ル・グインの『所有せざる 人々』における仕事について  (発表者) Larson, Michael (司会) 木原 健次
<b>シンポジウム  1</b>  <b>ワークショップ</b>  14:00   16:00	シンポジウム 1 (アメリカ文学) 第 1 室	ワークショップ (英語学・英語教育) 第 2 室
	十九世紀アメリカ文学における移動・移民  (講師) 城戸 光世 (司会・講師) 古屋 耕平 (講師) 大串 尚代	オンライン時代の授業のあり方を オンライン上で考える  (ファシリテーター) 関戸 冬彦
<b>シンポジウム  2</b>  16:10   18:10	シンポジウム 2 (イギリス文学) 第 1 室	
	新・旧「大陸」間を巡る初期近代視覚文化再考  (司会・講師) 松田 美作子 (講師) 山本 真司 (講師) 植月 恵一郎 (講師) 巽 孝之	

入室開始 (12:10)

12:20-13:00

【研究発表1】第1室

(発表者) 青山学院大学大学院研究生 堀内 直美

(司会) フェリス女学院大学教授 富樫 剛

『失樂園』における救済の教義  
—マルティン・ルターの良心論の視点に基づく死から生への転換

宗教改革の特徴であるマルティン・ルター(Martin Luther,1483-1546)の「信仰によってのみ」(sola fide)をジョン・ミルトン(John Milton, 1608-74)の『失樂園』(*Paradise Lost*)における神学思想の標語とする学者は多い。良心に語りかける神の言葉の内的変化としての信仰はルターの良心論の核心である。『失樂園』において、アダムとイヴが原罪という試練を神の恩恵によって信仰へ変換する過程は、まさにルターの思想の世界、死の試練を通して生への転換を果たす、つまり徹底的な絶望と破滅のどん底における悔い改めによって生じさせられた信仰が行うわざである。本稿では『失樂園』におけるアダムとイヴの救済の過程をルターの良心論の視点を通して考察し、ミルトン神学との表現の類似性を指摘しつつ、第3巻で御父が人間のうちに置く「審判者」(“My umpire,” 195)としての良心(“conscience,” 195)はルターの良心論における福音によって生まれ変わった超道徳的良心に一致することを論証したい。

【研究発表1】第2室

(発表者) 東京都市大学共通教育部外国語共通教育センター教授 秋山 義典

(司会) 明治大学准教授 山本 洋平

『グレート・ギャツビー』の鉄道旅行

『グレート・ギャツビー』の中で自動車果たす役割については、多くの論文で語られているが、この小説のなかで「鉄道」の役割についてはほとんど論じられていない。よく見るとギャツビーは「鉄道王」になりたかったとかれの父親は語る。とはいっても、かれが鉄道おたくだったわけではない。鉄道がアメリカという国の建設に大きな貢献があったからである。鉄道とは世紀末からアメリカでは重要な意味を持っていた。鉄道とは現代のオンライン・ネットワークのような役割があり、時間と空間で分断された人々を結びつけた。鉄道が「流通と循環」のキーワードのなかで孤立と断絶した人々を関係つけている。移動する乗り物としての車と鉄道の比較、鉄道の規則性と自動車の危険性、鉄道の時刻表、都市にとっての鉄道線路などの問題を取りあげた。鉄道がどのように運行しているのか、どのように社会の分断からその結合に進んだのか、鉄道をめぐる都市の循環を考察した。

13:10-13:50

【研究発表2】第1室

(発表者) 一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程 甲斐 絵理  
(司会) 獨協大学教授 片山 亜紀

善悪が揺らぐ小説  
—ヴェラ・ブリテンの『名誉階級』にみるフェミニズムの表出

英国の作家ヴェラ・ブリテンの長編小説『名誉階級』は、第二波フェミニズム期に作家の経歴との一致点から論じられてきたが、作家は序文で小説と自己との間に距離をとろうと努めている。これは先行研究でも矛盾を提示し、本書には、作家が雑誌や新聞で主張した「自己決定」した人生を歩む女性ではなく、二世帯に渡ってヴィクトリア朝の残滓を引きずり、女性の道徳的ジェンダー規範とフェミニズム思想を持つ自己の間で苦悩する女性たちが描かれている。そのため本発表は、作家が唯一馴染みのあるものとして認めている本書の舞台となる「地域」に着目し、レイモンド・ウィリアムズのコミュニティ論を援用して、田舎の共同体で遵守される道徳が都会のコミュニティにおいて作り出される新しい思想によって攪乱され変化するさまを描いていることを明らかにしたあと、作家が小説という形式の中でいかに世代を越えるフェミニズムのあり方を表出したかについて再考する。

【研究発表2】第2室

(発表者) 慶應義塾大学法学部訪問講師 Larson, Michael  
(司会) 白百合女子大学講師 木原 健次

アーシュラ・K・ル・グインの『所有せざる人々』における仕事について

アーシュラ・K・ル・グインのSFユートピア小説『所有せざる人々』(1974年)は、政治学やアナキスト哲学への貢献、あるいは、より広い意味での自由や社会秩序などを考察したものとして読まれてきた。しかし、これまであまり着目されていないように思えるのは、「仕事(work)」の描写である。ル・グインの小説における「仕事」という概念は、「労働(labor)」の他に「ライフワーク(lifework)〜つまり生涯を通じて従事する仕事」も含まれる。本発表では、このユートピア小説における「仕事」とコミュニティの関係に焦点を当てるだけでなく、コミュニティの発展に必要な、対立する権力関係についても明らかにすることを目指す。最終的には、そのことを作家のキャリアの問題とも結びつけて考察してみたい。

十九世紀アメリカ文学における移動・移民

（講師） 広島大学准教授 城戸 光世

（司会・講師） 神奈川大学准教授 古屋 耕平

（講師） 慶應義塾大学教授 大串 尚代

1840年代から50年代にかけて、じゃがいも飢饉などによる食糧難やヨーロッパ各国の政治的動乱の影響を受け、アメリカ合衆国にヨーロッパから大量の移民が流入した。またアメリカにおいても、工業化による農村部から都市部への人口流入、伝染病の流行による郊外への避難、西漸運動による西部への移住、移動手段の発達による国内及び国外観光の流行など、短期・長期を含む大規模な人口の移動が見られた。鉄道網の急速な発達や、カリフォルニアのゴールド・ラッシュ、西部や中西部の土地開拓などは、このような人々の大量移動に拍車を掛けた。同時代に書かれた文学作品においても、移動や移民といったトピックがしばしば大きな関心を持って言及されている。

本シンポジウムでは、十九世紀半ばのアメリカにおける移動・移民をテーマとし、各発表における作品分析をケーススタディーとして、人やモノの移動がもたらす人々の意識の変化について、グローバル化と反グローバル主義、観光と開発、難民・移民・人身売買といった、現在まで続く様々な問題を考える上でのヒントを、パネル・ディスカッションを通じて探してみたい。

女たちのアメリカ西部体験記

城戸 光世

近年西部文学への批評的関心が高まっている。*The Cambridge Companion to the Literature of the American West* (2016)をはじめ様々な研究書が次々登場しているが、その大きな特徴の一つは、これまでアメリカ西部やフロンティアにおいて、従属的立場や不可視の存在とされてきた人種的マイノリティや女性たちの前景化であろう。Nina Baym (2014)によれば、19世紀から20世紀初頭にかけて西部をテーマとした本を出版した女性は300人を超え、600冊を超える本が出版されていたという。19世紀前半にアメリカ西部に旅してその観察記 *Summer on the Lakes, in 1843* を出版した Margaret Fuller や、ミシガンに移住した自らの経験に基づいたフロンティア体験記を出版した Caroline Kirkland といった、東部の白人女性作家たちの西部体験記は有名であるが、それ以外にも西部に移住した様々な女性たちの体験記が、日記や伝記、回想録や旅行記といった形で数多く残され、出版されてきた。今回の発表では、Fuller や Kirkland、さらに同じく自らのフロンティア体験記を出版した Eliza Farnham ら、まだ中西部がアメリカ最西端だった 1830～40年代頃にアメリカ西部に赴き、その記録を残した東部女性作家たちの西部体験記を取り上げ、彼女たちが初期のアメリカ西部をどのように表象し、西部への移住経験が女性にとってどのような意味を持つと考えていたのかを比較検討してみたい。

## イザベルの歌——ニューヨーク、移民、コレラ

古屋 耕平

明記されてはいないものの、おそらくはニューヨーク州の農村部とマンハッタンの大都会を舞台とする Herman Melville の *Pierre; or, The Ambiguities* (1852) は、メルヴィルの長編にしては珍しく、ドメスティックな（国内の、家庭の）題材を扱った作品だが、そこには、ヨーロッパからの難民の娘であると推測される主人公の妻で姉（妹？）のイザベルを始めとして、外国からやってきた人や物などの様々な異物が登場し、物語を予想外の方向へと動かしてゆく。

イザベルの出自は作品中では明らかにされてはいないが、本発表では、その人物造形のモデルの一つの可能性として、1840年代から50年代にかけてマンハッタンのローワーイーストサイド周辺に大量に流入したドイツ系移民の存在について論じてみたい。また、作品内における移民の影を論じるにあたって、1848年にヨーロッパで猛威を振るい、1849年にはニューヨーク市に到達し、その後五年間に渡って蔓延したコレラのパンデミックや、同時期に起こった外国人排斥運動と、作品の関係についても考えてみたい。

## 旅する子どもたち——ウォーナー、カミンズ、孤児列車

大串 尚代

1854年10月、ミシガン州にある小さな町の駅に、ニューヨークから45人の子供たちが到着した。列車に乗って都会から西部にやってきたのは、身寄りをなくしたり、頼れるあてをなくしたりし子どもたちだった。社会改良家チャールズ・ブレイスがニューヨークで子供支援協会を設立したのは、1853年のことだ。この頃、ニューヨークには約三千人の子どもたちが路上で生活していたとされる。ブレイスは子どもたちの道徳的な生育には家庭と労働が必要と考え、西部に子どもたちを送り出す (placing out) プロジェクトを開始した。

後に孤児列車と呼ばれるようになるこの事業が開始された年に出版されたのが、Maria Susanna Cummins の *The Lamplighter* (1854) である。主人公ガートルードは、孤児であるがゆえに移動を余儀なくされる存在である。家庭から家庭へ渡り歩くだけでなく、もともと彼女ははるかりオ・デ・ジャネイロからアメリカに移動してきた過去を持つ。同時期に出版された Susan Warner の *The Wide, Wide World* (1850) の主人公エレンのまた、親をなくし、田舎の叔母の家に滞在したあと、スコットランドへと移動する。アメリカ文学において、孤児とされる子どもたちの移動にはどのような意義があるのか。なぜ子どもたちの移動が描かれるのか。本報告では、19世紀の孤児物語を中心に考察しつつ、孤児列車を現代の文脈で読み替えた Valeria Luiselli の *Lost Children Archive* (2019) まで接続した議論を目指したい。

14:00-16:00 第2室

【ワークショップ（英語学・英語教育）】

オンライン時代の授業のあり方をオンライン上で考える

（ファシリテーター） 白鷗大学准教授 関戸 冬彦

昨年来、大学ではオンライン授業が主流という表現が適切かどうかは別にして、それをもはや避けては通れない、いわばオンライン時代になってきている。本ワークショップではそうした時代的な背景に鑑み、いまわれわれが英語関連の授業で出来ることは何なのか、これから向かう先はどんな授業（のスタイル）なのか、を幅広く検討したい。ワークショップと銘打っているのは、これは登壇者からの一方通行的な発表ではなく、参加者全員がそれぞれの状況を共有し、またそれぞれの考えを自由に述べてもらう時間だからである。よってファシリテーターは一定の話題提供は行うものの、それ以降は Zoom の機能をうまく活用し、文字通り参加者のみなさまが「参加」してもらう時間を設ける予定である。是非、これまでの経験、知見を持ち寄っていただき、参加者全員にとって実りある時間としたい。

新・旧「大陸」間を巡る初期近代視覚文化再考

(司会・講師) 成城大学教授 松田 美作子  
(講師) 青山学院大学教授 山本 真司  
(講師) 日本大学特任教授 植月 恵一郎  
(講師) 慶應義塾大学名誉教授 巽 孝之

初期近代英国は、言語芸術に比べて視覚芸術の成果が乏しいと言われてきたが、近年、エリザベス・ゴールドリングらの研究に拠って、君主の地方への行幸（プログレス）やパジャントなどに用いられる視覚的なイメージが、従来考えられていたより大きなインパクトをもっていたことが検証されている。それらは英国のみならず、大西洋を渡って新大陸の文学や文化にも多様な影響を及ぼしている。そこで本シンポジウムでは、宗教改革以降の新教徒の移動にともなうイメージの受容と変容に注目し、主に新・旧「大陸」間におけるエンブレムなどのプリントに描かれた図像を取り上げ、視覚文化の展開と変遷を再考する。

具体的には、エンブレムブック作成の動機かに宗教や政治と密接に関わっていたことを指摘し、17世紀に入って個人の信心のためにエンブレムが変容した過程や、エンブレムブックのエンブレムが物質文化において応用され、それらが新大陸に持ち込まれて受容された点を追求する。さらに、ルネサンスの人文主義的なエンブレムの伝統的寓意が、新大陸のピューリタン文学に影響を与えたことや、新大陸を表わす女性像が、いかにアメリカニズムを構築していくかをピューリタン文学も含めて検証する。空間的な拮抗りのなかで、視覚的想像力がテキストと結びついて生み出す文化の実相に迫りたい。

ホイットニーからクォールズへ  
——視覚文化におけるエンブレム

松田 美作子

エンブレム作家達は、ある伝統的イメージに新たな「もの」を組み合わせ、詩文でそれに意味を与え、多様な寓意を生み出す。それらはたちまち空間的、時間的境界を越え（*imagines volant*）、消費が進むと変容する。「大陸」のエンブレムを借用し、レスター伯のネーデルラント遠征の宣伝目的で作られたホイットニーの『エンブレム選集』（1586）もその一例だが、サー・フランシス・ドレイクの紋章の一部を用いて、彼が考案したエンブレムは古典文学の伝統を取り込んだ寓意が付加され、政治化に収まらずに受容される。元来エンブレムは王侯貴族への個人的奉獻物であり、ジェームズ朝におけるピーチャムのエンブレム集もまた、王への奉獻物として機能したが、ロード大司教時代に出版されたクォールズの『エンブレム集』（1635）は、「大陸」のカトリック派の図像をプロテスタント派の瞑想に合った調整がなされ、新大陸へも伝播していく。イメージは信心の助力として機能し、特定の個人や社会ではなく、個々人の内面に向けられ、エンブレムの変質がみられる。

宗教改革後、オランダ移民やユグノーの流入により社会的恩恵を受けた英国は、16世紀後半から17世紀前半にかけてイコノクラストからイコノフォビアへと展開する過程で大きな物質・視覚文化的発展をとげている。膨張する一方の世界に対する漠然とした不安感、かえって小部屋で実践される瞑想や空想といった思考空間への志向をも助長したが、エンブレムブックもその一助となったメディアのひとつである。また、エンブレムの図像は、モットー（題銘）やエピグラム（詩文）よりも多く様々な装飾（美術）に用いられたが、その痕跡は、例えばタペストリー以外には、天井画や壁画、そしてバンケット（デザート）・トレンチャーなどにわずかに残っているのみである。本発表では、主に米国東海岸のMET美術館収蔵のバンケット・トレンチャーのイメージとテキストを、ロンドンの博物館に残されたものと比較しながら分析することにより、英国からの「移動」によって物質・視覚文化的意味がどのように変化したかということだけでなく、そもそもなぜわざわざ「それ」をもって「移動」したのかという謎を探求してみたい。

鯨のエンブレムのトランスアトランティック  
—“very like a whale”（『ハムレット』3幕2場）

植月 恵一郎

たとえば、十六世紀中頃の日本にカトリックの典型的なイメージの一つ「燃える心臓」が伝搬していた痕跡は、Francisco de Xavierの有名な肖像画で手にした「燃える心臓」で確認できる。大航海時代にあってエンブレムが大西洋も移動したことは想像に難くない。ここではHerman Melvilleのテキストで言及された鯨（またはイルカ）のエンブレムを手掛かりに、その起源から同テーマのエンブレム群の移動／異同について考察する。

十七世紀は「エンブレムの世紀」とも呼ばれ、verbal and visualを一体化したエンブレムがAndrea Alciato、Joachim Camerarius the Younger、Jacob CattsらからイギリスでGeffrey Whitney、Henry Peacham、George Witherらによってどのように変容し、十九世紀アメリカのテキストに届いたのか明らかにしてみたい。

当時誰も目にしたことのない生きた鯨の実体とはほど遠いLeviathanやsea-monsterの仮想表象から、如何にリアルな鯨に関するイメージとテキストを獲得するか、大航海時代の時空の拡がりの中で、正確な可視化への欲望がイメージとテキストへ如何に昇華され、自然文化誌を書き換え、豊饒な視覚文化を産み出したかを探る。

19世紀アメリカ・ロマン派を代表する超越主義思想家エマソンは、敬愛するスウェーデンの神秘主義者スウェーデンボルグが「自然と魂の力がいかに連動するかを示した」ばかりでなく「五感で知覚する現実世界そのものに象徴的ないし霊的な性格 (the emblematic or spiritual character) があると洞察した」と述べている (“Nature” [1837])。

この発想は、19世紀を待たずとも、15世紀末、コロンブスの新世界到達以降のヨーロッパによるアメリカ征服戦略としての視覚的類型学として、連綿と耕されてきた伝統に則る。それは、新世界を見たこともない画家たちが想像力を全開させて描いてきた図像群に如実に反映しているだろう。その端緒は、ネーデルラント系のストラディナスの筆になる作品に基づく木版画「アメリゴ・ヴェスプッチのアメリカ再発見」(1580)とされる。そこで表象されたジェンダー・ポリティクスが、やがてアングロアメリカの図像学に影響を与え、ホーソーンに代表されるロマン派作家たちが積極的に取り込むことになったのではあるまいか。この仮説よりアメリカン・アレゴリーの系譜を提起したい。